令和５年度　府中町立府中南小学校　学校自己評価表

学校教育目標	自分が学ぶ　みんなと学ぶ かしこく　やさしく　たくましく	経営理念 ミッション・ ビジョン	**「共育」子ども大人も共に育つ学校・家庭・地域** １共に学ぶ子ども…自ら学ぶ子・自分や友達を大切にする子・根気強くチャレンジする子 ２共に育つ教職員…子どもと共に自ら育つ教職員・出会いを大切にする教職員 ３地域と共に育つ学校…自分が好き 友達が好き（児童）　子どもと共に学び合おう（保護者） 学校と共に子どもを育てよう（地域）

ビジョン（中期経営目標）実現に向けての現状（進捗状況）と今年度の位置付け	不登校や発達に課題のある児童の実態から、組織的な生徒指導体制の推進を図ると共に、学校とは「学びを通して人をつなぎ共に育つ場である」ことを家庭・地域と再確認しつつ、「命の教育（3 年次）」を中心として各部の取組を横断的につなげ、充実させていく。

評価計画（中期経営目標を設定して１年目）

A　中期（３年間）経営目標	B　短期（今年度）経営目標	C　目標達成のための方策	D　評価指標	目標値（%）	E　評価結果			
					（１０）月		（２）月	
					達成値	評価	達成値	評価
a 命の教育の充実	・自ら課題を見つけ、解決しようとする児童の育成	・児童の気づきや思いを大切にした命の教育ストーリーの立案（教科横断的） ・自己内対話を取り入れた主体的な学習の充実 ・主体的な学習を促すためのルーブリックを意識した評言	自己内対話を取り入れ主体的な学習を促す評言活動を意識した授業作りに取り組む教師	80%以上	65.2 (81.5)	B	65.5 (81.8)	B
			自分で新たな課題を見つけたり、調べたりする児童	80%以上	87.1 (109)	A	90.5 (113)	A
b 読書活動の推進	・自分から本を選び読書をしようとする児童の育成	・委員会活動・縦割り班活動を中心とした、本や図書室にさらに親しむ活動を設定する。 ・読書活動を取り入れた単元づくりに関連した並行読書を推進する。 ・「リブロカード」を利用して、目指す「読書名人」の姿を児童に具体的に示していく。	自分から進んで読書ができる「読書名人」の割合	80%以上	71.4 (89.3)	B	66.7 (83.3)	B
c 生徒指導体制の確立	・教職員による統一した指導（当たり前の文化） ・お互いの違いを認め合い、お互いを大切にする児童の育成	・SST の実施（年４回） ・同年齢や異年齢集団による協調的な関わりの場の設定（各学期１回程度以上）	「同年齢や異年齢集団と関わることが楽しい」と答えた児童の割合	80%以上 （上：同年齢 下：異年齢）	96.3 (120) 93.0 (116)	A A	97.3 (122) 90.4 (113)	A A
d 体づくり	・運動意欲の向上 ・食育の充実	・自分の目標をもって取り組む体育の授業づくり ・体育委員会が企画する「運動チャレンジ」を通して、体を動かす楽しさを味わわせる ・「栄養バランスの良い食事」の必要性に気づかせる授業の実施（年２回）	体を動かすことは楽しいと感じる児童	80%以上	90.9 (114)	A	92.1 (115)	A
			バランスの良い食事を心がける児童	70%以上	93.2 (117)	A	93.7 (133)	A
e 信頼される学校づくり（コミュニティ・スクール）	・「共育」活動の充実	・サポーター活動の発信、充実…ＣＳ事務局やＰＴＡと連携した周知活動 ・地域と教職員の協働した取組の推進（委員会活動とのコラボレーション）（授業や放課後学習支援） ・働き方改革の推進…会議の効率的な運営や業務のスクラップ＆ビルド等による子どもと向き合う時間の確保	教育活動の満足度（児童・保護者）	90%以上 （上：児童 下：保護者）	91.5 (102) 96.9 (108)	A A	92.8 (103) 96.3 (107)	A A
			教職員…子どもと向き合う時間の確保	85%以上	75.0 (88)	B	77.8 (92)	B

評価基準…Ａ：目標達成（９５％～１００％）Ｂ：おおむね達成（８０％～９４％）Ｃ：もう少し（６０％～７９％）Ｄ：できていない（５９％以下）
目標値を１００％として、達成率を計算する。「例　目標値８５％→アンケート結果９２％　→目標値を超えているので評価はＡ」

Ｆ　結果の分析・解釈（中間　１０月）　○…成果　△…課題　★…下半期の改善方策

＜ａ命の教育の充実＞
△教職員に対する「児童が対話を通して新たな課題を見つけられる授業づくりができているか。」という質問の肯定的な回答は 65.2%であり、全体的に、自信をもってできているとはいえない状況が浮き上がっている。今後は児童のふりかえりのなかに、新たな課題や問いが生まれるような授業づくりの意識づけが我々教職員に求められる。
○児童に対する「授業を通して、自分で新たな課題を見つけたり、調べたりしようとしている。」という質問の肯定的な回答は 87.1%であり、児童の自己評価の面では目標値に到達している。
△児童への質問は、低・中・高学年という発達段階を踏まえると、問いかけ方や受け止め方の点で工夫する必要があるのではないかという意見がでている。また、授業を通して見つけた問いについて、調べようとしているのかを見取る手段が確立していない点も課題として挙げられる。
★本校の学びのモデルの中でも授業モデルである課題発見解決学習の流れが浸透していけるよう、各学年部単位で研究推進部を中心に、授業の中に問いを生み出す授業づくりができるようなミニ研修を定期的に行う。
　児童に対しては授業の振り返りのモデルの中に、新たな問いを導き出すことを示すことで、学びの習得にとどまらず、新たな課題発見の機会を設けるようにし、「命の教育」を中心とした課題解決の取組の具現化を目指していく。

＜ｂ読書活動の推進＞
○リブロカード、「これができたら読書名人」の７項目を児童がチェックする様子を教師が見取ることで、読書について児童の抵抗がある点を確認することができた。
○読み聞かせを楽しみにしている児童が多い。
○図書委員会のリブロカード表彰に関わる「しおりコンクール」は、児童に好評だった。来学期への児童の読書意欲を高めることができた。
△本への興味がもてない児童がいる。
△教科書に紹介された本を児童が意識できてないことが分かった。
△取組期間が短くて、1学期に読んだ（リブロカードに書いた）数が目標冊数に達しなかった児童が多かった。
△リブロカードに読んだ本を書くことができない児童が多い。
△昨年体験した電子書籍ができないのかと児童から問い合わせがある。
△委員会活動で多忙だったり、図書室が遠かったりと高学年が図書室を利用しづらい。
△アンケートの文を読んで、「読書名人レベル３」になってないと自分は肯定的評価に印をつけられないと思った児童がいた。」
★自分なりの読書のめあてを考えさせるために、2学期からは、1ヶ月に読む本の冊数を自分で決めさせる。
★リブロカードに教科書に紹介された本を抜粋して載せ、読んだらチェックさせる。
★リブロカードの７項目中、今は全部できないと最高レベルにならないが、厳しいので、6/７項目で「レベル３」に改正する。
★クラスルームに電子書籍を読むことができる「学研キッズネット」のサイトを用意してあるので、児童に紹介する。
★縦割り学年で読書郵便・返信の取組を計画する。
★リブロカードに書く時間を毎週決まった読書タイムにするなど、記入時間を定期的に取ってもらう。
★リブロカードの記入カードを図書室だけでなく職員室や教室に置いたり、教室に配ったりする。
★図書委員会の取組として「おすすめの本」ポストを設置し、放送や掲示をすることで本の紹介をし合う。
★読み聞かせをしていただいた本はリブロカードに記入させる。
★高学年にも学活の時間を利用して読書について考えてもらい、図書室の利用を促す。
★学期末には、自分の読書について振り返る時間をもち、自己肯定感を高められるような声かけをしたい。

＜ｃ生徒指導体制の確立＞
○工夫しながら継続して取り組んできた縦割り班遊びを肯定的に捉え楽しみにしている児童が増えた。
○初回の縦割り班遊びの時間を長くしたことにより、自己紹介だけでなく、遊びもすることができたので、仲を深めることができた。
○５・６年生児童は、１・２年生と一緒に掃除をすることで、高学年の意識を高めつつある。
○縦割り班遊びや、折り鶴キャンペーン、平和展を通して、誰に対しても進んで関わろうとしたり、相手に応じてよりよく関わろうとしたりする児童の姿が多く見られるようになった。
○運動会では、全学年の種目をお互いに見合うことができた。
△１・６年生、２・５年生は、清掃での日常的な交流があるが、３・４年生は年度初め、４年生が３年生の掃除の仕方を教える交流はあったが、日常的交流がない。
△行事の中で、もう少し異学年での交流ができると良い。
★縦割り班活動の内容を充実させると共に、お互いの思いを伝え合う場として、振り返りを活かす。
★縦割り班活動をきっかけにして、他の学習や休憩時間などの交流にも繋げていけるようにする。
★パブリックデーでも、全学年が同時に見合える機会を設けるとともに、感想を伝え合える場（例　感想を紙に書いて渡す）を設ける。
★３・４年生も３学期に掃除の交流ができるように計画する。
★学習内容や行事等で交流する機会を計画的に設ける。

＜ｄ体づくり＞
①運動意欲の向上
○肯定的な評価は90.9%で、目標値を上回った。
△１学期は楽しみながら学べるものが多かった（運動会．水泳．体力テスト等）。２学期以降も意欲を向上させる手立てが必要である。
②食育の充実
○肯定的な評価は93.2%で、目標値を上回った。
○７月の生活目標や給食放送で「主食・主菜・副菜を意識しよう」と呼びかけることができた。
○栄養士による食育の授業が分かりやすかった。
○給食中に献立と一口メモを大画面で提示するのも効果的だった。
△７月の生活目標や給食放送終了後もバランスを意識させる手立てが必要である。
★①運動意欲の向上
・２学期以降も意欲を維持できるよう、体育委員会の活動を中心に呼びかけていく。
（運動チャレンジ・南小サーキット等）
★②食育の充実
・給食中に視聴する献立や一口メモに「今日の主食・主菜・副菜」を取り入れ、各学級で指導する。
・バランスの大切さに関するポスターを配布する。

＜ｅ信頼される学校づくり＞
○ＰＴＡ総会で、サポーター活動についてコミュニティ事務局の方に、説明していただいた。働く保護者が増え、サポーターが限られた人になってきているため、今後の世代交代も鑑み、年度初めにサポーターの新規募集が行われた。20 名の新規登録があったとのことだった。
○コロナの 5 類引き下げにより、参観日や運動会で一世帯の人数制限を無くすなど、工夫しながら保護者の希望を取り入れるようにしたため、保護者の満足度は高かった。
○ＨＰの頻繁な更新や学校だよりで、「共育」活動の発信はかなりできた。
△保護者アンケートの「保護者、南っこサポーターとして、教育活動に積極的に参加したい」という項目の否定的回答が 22.3%あった（昨年度末 25.3%）。教員も、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動、本校のサポーター組織等について、あまり理解していないのではないかと思われる。教員がまず正しく知った上で、保護者や児童を啓発していく必要があると思われる。
△朝の欠席連絡や、放課後の欠席者への電話連絡、毎日の連絡帳を教員が負担に感じていることが働き方改革研修のアンケートから分かったので、改善策を打てそうなものは提示したが、そこから進んでいない。
★「教育活動に積極的に参加したくない」保護者の理由を調査し、原因を改善する。
★コミュニティ・スクールや地域学校協働活動についての教職員研修を行う。
★朝の欠席連絡やプリント配布の手間は、2学期から町が採用する新しいメールシステムで改善される予定。
★担当者と相談し、改善案のたたき台を教頭から提示する。（Google による連絡帳、ノー宿題デー、学期末の成績付け時間確保）

F　結果の分析・解釈（最終　２月）　　○…成果　△…課題　★…来年度に向けた改善方策

＜ａ命の教育の充実＞	＜ｂ読書活動の推進＞	＜ｃ生徒指導体制の確立＞	＜ｄ体づくり＞	＜ｅ信頼される学校づくり＞
○教職員に対する「児童が対話を通して新たな課題を見つけられる授業作りができているか」という質問に対して、１年を通しての肯定的な回答の数値に大きな変化は見られなかったものの、「よくあてはまる」と回答した教師は７月の 8.7%から 12 月の 18.5%と増加傾向がみられた。 △教職員に対するアンケートの問いが、授業づくりができているか否かという最終的な判断が難しい内容であったとはいえ、あてはまらないという回答が 0%から 10.3%に増加した点は、研究に対する取り組みの課題と捉えられる。 ○児童については、「授業を通して、自分で新しい課題を見つけたり、調べたりしようとしているか」との問いに対して最終的に 85%の児童が肯定的な回答を示し、「友達の意見や考えを自分の考えと比べながら聞いたり考えたりしているか」との問いに対しては 90.5%の児童が肯定的な回答を示している。これらの問いに対しては年間を通して高い数値を示していることから、自己内対話を取り入れた主体的学習を軸とした命の教育ストーリー作りを工夫することは「自ら課題を見つけ解決しようとする児童」の育成につながるのではないかと考えられる。 △いずれの問いかけも数値の向上は見られなかった。１年間の取組が児童に与える影響の変化がみえなかった点は課題であると言える。 ★本校の学びのモデルについて、理論研修の時間を十分にとっていく必要がある。また、校内研修に併せてなるべく早い段階で、研修内容を自分の学年の研究に反映させられるような学年部ごとの研修が必要であると考えられる。 ★児童に対するアンケートの一つ目の問いに関しては、「新しい課題」という問いかけ方がわかりにくかったと考えられる。今後は “課題”を“疑問”に置き換えて子どもたちに問いかけていく。また２つ目の問いに関しては、考えが深まったかどうかを問いかけ、他者の意見や考えが学びの深まりにつながったのかを検証していく。児童に対しては、これからも授業の振り返りの中で、新たな問いを導き出すことを求めていく。その具体的な方法として、ルーブリックに「問い」を生み出す児童の姿を設定し、目指す子ども像のイメージをはっきりさせる。	○本を読む習慣は、身についてきた。 ○読む本のレベルが上がった。 ○リブロカードに書くのを忘れる人のために図書委員が週に１度放送をしたり、用紙を教室の届きやすい場所に置いたりすることでリブロカードへの書き忘れが減った。 ○教科書に紹介された本をリブロカードに載せたり図書室の目立つ場所に置いたりすることで様々な本の種類に興味を広げることができてきた。 ○第２図書室の壁面掲示が、児童同士の話題に上がるなど、環境を整えることが児童の読書への関心を高める一助となっている。 ○読書ビンゴや図書委員による読み聞かせなど、図書祭りでの活動で、読書をすることを楽しむ雰囲気を作ることができた。 △２学期になると、厚い本を読むようになった反面、読書冊数は減った。 △返信はがき付きの読書郵便を縦割り班で行った。相手意識のある本の紹介ができていたが、相手が異学年だったため、紹介しにくいと感じた児童が多かった。 △読書を日常に取り入れることができる児童と、読むことに少し抵抗のある児童には、読書量に差がある。 △児童は、新しいものや目新しいデザインのものでないと、手に取りにくい傾向があり、名作だが古い本は読む児童が少なかった。 ★リブロカードのチェックの際、単に読書冊数での評価でなく、朝読書の時間の読書の質を見取り、読書の内容のレベルが上がったことをしっかり評価するような教師の声掛けが必要である。 ★読書郵便・返信を、放送で紹介するなど、継続して高学年のリードで読書を推奨する活動を行い、子どもたちの話題に、読書が日常的にのぼる文化を作る。 ★学校図書館司書と連携して、図書室の本をさらに刷新したり手に取りやすい展示にしたりする。 ★リブロカードのチェックにこだわり自分への評価が下がっている児童がいるので、達成目標を「自分で読みたい本を選んで本を読むことができる」という文言でアンケートを取り、80%を目指すことが妥当であると考える。	○評価結果から、２項目とも目標を達成することができた。１学期と同様、同学年との関わりについては高水準で目標を達成している。２学期は、パブリックを中心に学年で取り組む学習活動を通して、お互いの良さを認め合いながら協力して作り上げた達成感をもつことができたと考えられる。 ○異学年の交流においては、１学期より 2.6%達成値は下がったが、縦割り班遊びやあいさつ運動など、異学年との関わりを楽しめる場が多くあり、高い水準の達成値を残すことができている。 ○縦割り班遊びでは、６年生が１回目の振り返りをもとに内容を改善し、下学年がより楽しむことができた。また、３年生が作ったカルタを使って遊び、３年生の頑張りを認めることができた。 ○これまでの縦割り班活動の積み上げにより普段から積極的に下学年と関わりをもつ６年生が多く見られ、仲を深めることができている。 ○パブリックデーの児童発表会で、各学年の発表をお互いに鑑賞することで、お互いの良さを認め合うことができた。また、同学年の児童でお互いの良さや違いを認め合いながら、学年の発表をつくり上げていくことができた。 ○行事でだけでなく、休憩時間にも、２年生の九九を５年生が確かめるなど異学年の交流の場を設けることができた。 △行事を設定すると、その場での交流はできるが、普段の生活の中でも交流ができるようにしたい。（遊ぶ・あいさつなど） ★パブリックデーの発表を見た後の感想を交流する場が、全体で持てなかった。来年度は１学期の改善策で書いたような場を設ける。 ★縦割り班の活動を遊びだけでなく、あいさつ運動にも広げ、異学年の交流の場を増やす。 ★行事だけでなく、休憩時間でも異学年の交流ができるような方法を考える。(３学期に思い出作りで、ペア学年で遊ぶ等)	①運動意欲の向上 ○２学期は好天に恵まれ、しっかりと外遊びができた。 ○体育委員会で運動チャレンジを企画し実施した。 ○体育朝会で様々な跳び方を紹介し意欲付けをした。 ○郡陸上参加に向け、陸上種目の授業に重点を置いて指導した。 △グランドに出て遊ぶ児童と室内に残る児童が固定化している。 △学年が上がるにつれ、体格などの理由から運動に抵抗感を示す児童が増えている。 ②食育の充実 ○給食委員会の活動として ａ栄養ボード記入…献立、３大栄養素、給食標語を書く等、児童が、食べることの大切さに興味・関心をもてるような活動を行った。 ｂ10 月の生活目標…達成に向けた啓発活動を行った。 ・ひみこの「はがいーぜ」標語ポスター作製。 ・３日間限定残菜調べを実施し食べ切る力を養った。 ・校長先生にインタビューをし、給食の思い出等意欲を高める話をしていただいた。 C11 月に給食クイズラリー実施…食に関する知識を楽しみながら学ぶことができた。 ○栄養教諭と連携し、学級で食育の授業を行いバランス良く食べる大切さを学んだ。 １年…「食事のマナーを知ろう」10 月中旬 ２年…「野菜と仲良くなって風邪予防」11 月上旬 ３年…「郷土料理について知ろう」10 月上旬 ４年…「備蓄マスターになろう」11 月中旬 ５年…「朝食を見直そう」９月上旬 ６年…家庭科の学習でオリジナルの献立を立案した。 特支…食育参観日を実施し食の大切さを伝えた。 △食べ切ってはいるが、必要以上に食べ過ぎたり減らしすぎたりして、適切な量をとれていない児童がいる。 △給食準備中騒いだり立ち歩いたりする児童が見られる。待っている時のルールが守れていない。 ★①運動意欲の向上 ・学級レクや委員会の企画等を活用して、外遊びの楽しさを全体で共有させる。 ・毎時間の体育の授業の導入で、主運動につながるゲーム等を取り入れ、苦手な児童の不安を緩和させる。 ★②食育の充実 ・必要以上に食べ過ぎる児童はゆっくり噛んで食べる、減らしすぎる児童は完食をめざし徐々に減らす量を少なくしていく指導をする。 ・準備中は読書をする等、着席して待つよう、学級の実態に合わせた指導をする。	○サポーター活動では、特にグリーンサポーターで、ＣＳ事務局が呼びかけポスターを正門に掲示したり、登録者に呼びかけたりしたことで、児童・保護者共に新規の参加があった。 ○「教育活動に積極的に参加したくない」保護者の理由を、学校評価アンケートで調査した。「参加したいが仕事で平日は時間が取れない。」が多く、「人と関わる・積極的に行動するのが苦手。」も複数あった。参加理由としては「子どもの様子が分かる。」が多く、「子どもや先生との繋がりができる。」「仕事はあるが子どものために保護者としてできるだけ協力したい。」「子どもが喜ぶ。」「子と一緒に活動するのは良いこと。」等があった。 ○12/26 に、サポーターにも参加してもらい、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動についての教職員研修を行った。各学年でシラバスを元に、サポーターと連携したい単元や教育活動をピックアップした。 →ＣＳ事務局連携して３学期中に整理し、来年度に繋げていく予定。 ○「ノー宿題デー」や「授業時数短縮による成績処理の時間の確保」を行ったことや、コドモンの活用で出欠連絡や欠席者への連絡が容易になったことにより、教員に少し余裕が生まれ、「児童と向き合う時間」の数値が微増した。 ○年代別で業務改善研修を行うことで、教員間のコミュニケーションの幅が広がり、充実感の向上についての生の声を拾えた。 △教員アンケートでスクラップ＆ビルドの数値が 56%であった。 ★「教育活動に積極的に参加したくない」保護者の理由をＰＴＡ本部やコミュニティ・スクール事務局と共有し、対応を工夫する。 ★スクラップ＆ビルドの数値が低いので、各分掌部で来年度の行事予定を見直し、スクラップできる部分はないか各分掌部で考える。（日課表、会議の持ち方他） ★充実感についての教員の声を具現化していく。（主任の負担軽減、日常の授業交流他）

＜学校の大きな方向性に照らして＞
　コミュニティ・スクールを基盤とした「共育」の理念のもと地域に根ざした「命の教育」の充実と組織的な生徒指導体制を図った。各部の取組を横断的につなげることは、教育活動の一体化につながり、「自分が学ぶ　みんなと学ぶ」児童の育成に効果的であったと考える。

＜学校運営協議会委員による評価＞
・目標・方策・設定の適切さ（Ａ）・評価（結果）の適切さ（Ａ）・分析・解釈の適切さ（Ａ）・改善方策の適切さ（Ａ）→　総合評価（Ａ）

学校関係者評価を受けての改善方策（修正）

＜学校の大きな方向性に照らして＞
　今年度の学校自己評価に対して、学校関係者では、全体を通して「Ａ：適切である」との評価であった。今年度は、前年度の改善方策を参考にしながら、各分掌部の取組を横断的にリンクさせながら学校全体で取り組んだ。「命の教育」は三年次を迎え、主体的な学びを引き出す教師の評言も、教科を超えて意識されるようになってきたが、自身の取組がまだ不十分であると考える教員も多い。来年度は、これまで研究してきた「命の教育」を基盤としつつ、教科における主体的な学びと学力向上を図っていきたい。また、本校のコミュニティ・スクール運営やサポーター活動は、地域や保護者が主体的に動いておられることが強みである。そこに、さらに多くの保護者や地域に関わっていただけるよう工夫し、これまで取り組んできた「命の教育」をさらに連携、充実させていくことにより、次年度も学校教育目標の実現と「共育（共に育つ）」の具現化を目指す。